

2020年度 一般社団法人 日本文化人類学会
第3回理事会 議事録

日時：2020年9月20日（日）14：00～17：10

会場：Zoomを使用したオンライン会議

<出席者>窪田幸子、飯嶋秀治、飯田卓、石井美保、岡田浩樹、小川さやか、亀井伸孝、川口幸大、木村周平、湖中真哉、里見龍樹、椎野若菜、田辺明生、中川理、真島一郎、丸山淳子、箕曲在弘（以上、理事）、岸上伸啓（以上、監事）

<委任状提出者>東賢太朗、曾我亨、名和克郎、松村圭一郎、森田敦郎（以上、理事）、三尾裕子（以上、監事）

〔承認事項〕

1. 第2回理事会議事録について文言調整の上承認。
2. 新入会員の承認
 - ・21名の新入会員につき業務執行理事の間で入会を承認したことを報告し、事後承認。
3. 会費特例措置の承認
 - ・14件の会費特例措置の申込について、業務執行理事の間で承認したことを報告し、事後承認。

〔報告事項〕

1. 代表理事報告
 - ・日本学術振興会へ会長名で令和2年度科学研究費の繰り越し要件の緩和および同手続きに関するお願いの手紙を送付したことを報告
 - ・日本学術会議主催、本学会共催の公開シンポジウム「コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって」（2020/9/19開催）に270人ほどの参加があり、新聞社3社が記事掲載予定であることを報告。
 - ・前回理事会での決定にもとづき、2021年度朝日賞の学会推薦を行ったことを報告。
 - ・日本学術会議の各分科会に関し、間もなく期が終了すること、文化人類学分科会、多文化共生分科会、歴史的遺物の返還に関する検討分科会の3つが本学会に関係しており、来期はメンバーを変えて継続することを報告。各分科会ではそれぞれ提言を提出したことを報告。その他、地域研究基盤分科会も本学会とかわりがありこちらも提言を行ったことを報告。また、アイヌの遺骨に関しては提言を提出しないこととなったが、活動内容と経緯については日本学術会議HPで公開中であることを報告。
 - ・IUAESの今年のクロアチア大会は来年3月に延期の上、ハイブリッド型での開催を検討中であること、その後は2021年11月にメキシコ、2022年はロシア、2023年はインドで本大会を開催予定であることを報告。また、WCAAは毎月1回webinerを開催していることとその内容について紹介。
 - ・日刊建設工業新聞から本学会会長への取材依頼があり、オンラインで取材を受けたことを報告。10月に予定されている同紙記念号へ掲載予定。
 - ・台湾人類学会年次大会（9月26日、27日開催）において、会長宛にキーノートスピーチの依頼があったことを報告。COVID-19流行の影響により、オンラインでの出席、

スピーチを行う予定であることを報告。

2. 業務執行理事（庶務担当）報告

- ・法人の変更登記書類の作成と発送について引き続き作業を行っていくことを報告。
- ・前回理事会以降に行った理事会メール審議について下記の通り報告。
 - 1) 日本学術会議主催の公開シンポジウム「コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって」の本学会共催を承認（7月9日配信、7月17日承認）
 - 2) 北海道アイヌ協会主催「国際先住民族の日記念事業」の本学会共催を承認（7月14日配信、7月17日承認）。
 - 3) 社員総会議事録と第1回理事会議事録について、登記手続き等に使用するバージョンと学会HP等で公開するためのバージョンの2種類作成することを承認（7月18日配信、7月27日承認）。
 - 4) GEAHSS（人文社会科学系学協会における男女共同参画推進連絡会）の幹事学会持ち回り制に関するアンケートへの回答について、委員会提案の「依頼があれば検討する」との内容で回答することを承認（7月26日配信、7月30日承認）。
- ・「第10回（2021年度）三島海雲学術賞」の学会推薦に関して選考を行ったこと、推薦書を財団へ郵送することを報告。

3. 業務執行理事（会計担当）報告

- ・第54回研究大会預け金として前年度に実施委員会へ支出された120万円が返金されたことを報告。COVID-19流行により急遽開催方式の変更を行ったことによる支出増と収入減を見込み、預け金が返金されない想定で2020年度予算案を組んだが返還があったことを補足説明。次回理事会で54回大会決算報告を予定。
- ・植松東アジア研究基金に関し、COVID-19流行により助成対象に影響が出ており、既に昨年度採択のうち2件から期間延長の依頼があり、個別に運営委員会で審議を行い対応していることを報告。他の助成対象者についても進捗状況の確認を予定していることを報告。

4. 業務執行理事（総務担当）報告

- ・GEAHSSからのアンケートに対し、担当委員会で検討した回答案について理事会MLで審議、承認されたこと、回答案に基づき回答したことを報告。
- ・2021年度・2022年度学会主催公開シンポジウムの担当者について、前回理事会決定に基づき、公開シンポ再開、開催地の選定は歴代の開催地から見て偏りのないように選定したことを報告。2021年度は佐久間寛会員（明治大）が担当、2022年度は松村理事をアドバイザーとし、中空萌会員（広島大）が担当。2021年度開催に向け、澁澤基金助成や科研費へ応募する予定であることを報告。
- ・今年度開催のCARA（人類学関連学会協議会）合同シンポジウムについて、今年度は日本民俗学会が当番学会であること、本学会からは新ヶ江章友会員（大阪市立大）が登壇予定であることを報告。この合同シンポジウムについて日本民俗学会から連絡があり、COVID-19流行の影響で当初予定されていた民俗学会研究大会中の開催ではなく、別個に12月13日にオンラインで開催予定との連絡があったことを報告。

5. 業務執行理事（広報担当）報告

- ・前回理事会以降、会員連絡用メーリングリストの運用内規に基づき計12件のJASCA-INFO配信を行ったことを報告。

6. 各種委員会報告

- ・『文化人類学』編集委員会：石井理事より、85 巻 2、3、4 号の進捗、その先の特集についても進捗状況を報告。
- ・JRCA 編集委員会：欠席の東理事に代わり田辺理事より、Vol.21-1, 2 の進捗状況を報告。
- ・「国際情報発信強化」特別委員会：欠席の森田理事に代わり箕曲理事より、国際研究集会発表助成の応募状況と審査結果を報告。
- ・研究大会実施委員会：中川理事より、第 1 回サーキュラーを公開したこと、第 2 回サーキュラーの公開は 10 月 10 日を予定していることを報告。また、第 54 回研究大会の決算報告を次回理事会で行うこと、第 54 回研究大会発表要旨を J-STAGE へ掲載したことを報告。
- ・研究育成委員会：椎野理事より、複数件の応募があったこと、9 月 24 日が草稿提出期限であることを報告。応募者の中に英語で発表の可能性がある方が複数いること、応募要項に英文での草稿の語数設定や、発表言語に関する記載が無かったことなどは今後の検討課題であることを報告。
- ・倫理委員会：亀井理事より、7 月下旬頃に Kimura Project 代表の木村二三夫さんからアイヌ遺骨等に関する遵守 3 項目について本学会へ通知文書が届いたことを報告。これまでの経緯として、学会は倫理指針の策定の枠組みに参加していること、このような文書が届いた際には、本学会としてどのような立場をとっていくべきか検討が必要であることを確認。意見交換の結果、今回の文書に対し学会から会長名で返信を行うこと、返信については委員会内で原案を作成し、総務会で確認、事務局から先方へ郵送することとした。

〔審議事項〕

1. 学会共催シンポジウム（9 月 19 日開催）に関するアルバイト雇用について（代表理事）
 - ・窪田代表理事より、日本学術会議シンポジウム「コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって」に寄せられた質問への対応と処理のためにアルバイトを雇用することが望ましいが、日本学術会議には予算が無いため学会でアルバイト代を負担することが提案され、審議の結果承認された。
2. 学会共催シンポジウム（9 月 19 日開催）結果のウェブサイト公開について
 - ・窪田代表理事より、日本学術会議シンポジウム「コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって」に寄せられた質問と回答について集計結果を学会 HP で公開することが提案され、審議の結果承認された。
3. 日本学術会議からのシンポジウム（10 月 11 日開催）後援依頼について
 - ・窪田代表理事より、日本学術会議主催の公開シンポジウム「With コロナの時代に考える人間の「ちがひ」と差別～人類学からの提言～」について本学会に後援依頼があったことが説明され、審議の結果、本学会の後援が承認された。開催案内を JASCA-INFO で配信することを確認した。
4. 神戸人類学研究会からのシンポジウム共催依頼について
 - ・業務執行理事（庶務担当）の箕曲理事より、神戸大学主催の公開シンポジウム「コンヴィヴィアリティとは何か―古くて新しい社会モデル（仮）」の共催依頼があったことが報告され、審議の結果、本学会の共催が承認された。
 - ・学会後援や共催の基準について意見交換がなされ、過去の例では学会と同格の外部機

関や連携機関からの申請に対して認めていたことを確認した上で、今後の方針、基準の設定についてはまずは総務会で議論することとした。なお、現行の枠組みの活用として、地区研究懇談会と共催することで JASCA-INFO で開催情報を配信できるなど、広報上有用であることが情報共有された。

5. (一社) J ミルクからのシンポジウム後援依頼について
 - ・業務執行理事(庶務担当)の箕曲理事より、一般社団法人 J ミルクからシンポジウムの後援依頼があったことが説明された。関係者が学会員であることを確認した上で、定款上の本学会の目的や活動と合致しているか等、慎重に意見交換した結果、先方に経緯や団体の背景などの詳細を確認の上、検討することとした。
6. ギース対応委員会構成について(ギース対応委員会)
 - ・ギース対応委員会委員長の椎野理事より、「男女共同参画・ダイバーシティ推進委員会」へ委員会名称変更の提案があり承認された。
 - ・委員は椎野理事、真島理事、岩佐光広会員(高知大)、中谷文美会員(岡山大)、嶺崎寛子会員(成蹊大)とすることが承認された。
 - ・委員会名、委員の英語表記について委員会で検討の上広報・情報化委員会へ連絡することとした。
7. 学会への献本の扱いについて
 - ・『文化人類学』編集委員の湖中理事より、学会への献本の扱いについて編集委員会で検討したこと、学会事務局へ届く献本については 27 期までは書評主任が管理、28 期より事務局管理となった経緯が説明された。事務局の事務スペースを圧迫しているため、書評の対象とならず発行日から 2 年を経過した献本については東京都港区立の図書館へ寄贈することが提案され、審議の結果、承認された。
8. J-STAGE 掲載のための追加支出について
 - ・『文化人類学』編集委員の飯田理事、「JRCA」編集委員の田辺理事より、『文化人類学』及び「JRCA」の J-STAGE 掲載作業の効率化のため、1 号あたり 12000 円(税別)の追加支出を要するが、印刷会社からテキストデータの納品を受けたい、との提案があり承認された。
9. 基金・寄附等規程案および総務会規則案について
 - ・規程整備委員会委員長の木村理事より、基金・寄附金に関する下記 4 点の文書案が提案され、承認された。詳細は下記の通り。
 - ① 基金取扱い規程の覚え書き: 基本的に外から受け取る金銭は寄附金として処理して問題ないこと、基金と寄附の概念について説明がなされた。これまでの寄附金に対して「〇〇基金」という名称がついているが、これは今回の規程で定めた意味での基金ではなく、通称としての基金であることを確認した。また、個人に対し税金控除の見返りは法人としては提供できないこと、企業や法人は「損金」としての処理が可能であることが説明された。
 - ② 基金取扱い規程: 前回理事会からの変更点として、基金管理は法人の理事会が行うことを明記したことが説明され、規定が承認された。制定日は 2020 年 9 月 20 日、法人登記日の平成 30 年(2018 年) 8 月 7 日に遡って施行することとした。
 - ③ 寄附金取扱い規程: 用途を指定しない寄附金、あらかじめ学会が用途を特定し、それに応じて寄付された寄附金の 2 つの区分があること、受入手続きの担当な

どの記載を確認の上、承認された。

④寄附金申込書：申込書の書式が提案され、承認された。

- ・木村理事より、法人における総務会正式設置のために総務会規則（案）が提案され、審議の結果、実際の業務にあわせて随時変更を加えていくことを含め確認の上、承認された。
- ・各委員会に関連する各種規程の法人化に伴う変更について、それぞれ担当委員会において確認と、改定の検討を行うよう依頼がなされた。必要に応じ規程整備委員会が手伝えることとした。

10. ウェブジャーナルの創設について

- ・窪田代表理事より、会員から提案のあったウェブジャーナルについて、準備検討を行うワーキンググループの設置が提案された。発案者にも改めて協力を依頼予定であることが説明された。ウェブジャーナルは、現行の学会誌よりも少し素早く、査読なども軽く、機動性のあるものをイメージしているとの説明がなされた。
- ・現行の学会誌とのすみわけを明確にすることの重要性、人手の問題、査読の負担なども十分に議論する必要があること、映像やハイパーリンクといったウェブの可能性を活かす必要性など、意見が出された。
- ・審議の結果、理事会で出された意見を踏まえ、内容やスタイルについて引き続き検討を進めることが承認された。進捗や内容については『文化人類学』編集委員会と広報・情報化委員会とも情報を共有することとした。

11. その他

- ・亀井理事より、中部地区修士論文、博士論文発表会をオンラインで行い、非常に有意義なものであったことが報告され、オンラインによる大きな成果があることを確認した。
- ・第4回理事会日程案 2020年12月13日（日）14：00～

以上